

(3) インタビュー各班感想

A 班感想

KさんとOさんにインタビューをさせて頂いたのは昨年5月。私たちが在宅医療というテーマに取り組み始めてまだ間もない頃であった。正直なところ、当時は在宅医療についての基本的な知識もろくに把握出来ていない状態であったのだが、調査も終盤に差し掛かった今このインタビュー記録を読み返すことで、改めて在宅という現場で実際に働かれているお二人のリアルな声というものの価値に気付かされる。インタビューをさせて頂いて印象に残ったのは、お二人の患者さんへの配慮と在宅医療への思い入れである。「在宅医療とはどういうものか」という問いに対して、Kさんは「病院の病室がぼこっと自宅にかえるようなもの」、Oさんは「ナースコールを押したら誰かが来てくれる環境」とそれぞれ話してくれた。在宅での療養を希望される患者さんやその家族の方々の意思を尊重すると同時に、病院水準の看護の質も要求されるこの仕事。お二人以外にもこの調査で出会った看護師やヘルパーといったすべての方々共通して在宅医療に関わる方は患者さんと病院の架け橋となる存在なのだということを感じた。先日、厚生労働省は2012年度を「『新生在宅医療・介護元年』として立ち上げる」と発表し、「在宅医療・介護推進プロジェクト」として、在宅チーム医療を担う人材の育成 実施拠点となる基盤の整備 個別の疾患などに対応したサービスの充実・支援を3本柱に、在宅での医療・介護サービス体制の整備を図るとした(<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20120120-00000007-cbn-soci>)。在宅医療には人手不足や資金不足といった課題がまだまだあるが、このような政策の導入を積極的に行い、今後、在宅医療が少しずつでも前進していけばいいなと考える。

B 班感想

<K氏インタビュー感想>

まだ在宅医療というものをよく知らなかった私たちがK氏に教えていただく話は全てが新鮮だった。K氏の「病室がぼこっと家にかえるようなもの」という表現がとても印象的だった。息子さんが事務をされているということで、家族ぐるみで経営をされているというのも非常に興味深く感じた。K氏にはこの調査を通して深く関わっていただき、また、在宅介護・在宅看護の世界について教えていただきとてもうれしかった。

<O氏インタビュー感想>

医師会の看護ステーションの看護師の様子を聞かせていただいて、印象に残っているのはやはりセクハラについてである。インタビューを通して一番O氏の熱が入った部分で、そこに関しての私たちからの質問に対しても非常に丁寧に語っていただいた。また、事務室に設置されていたホワイトボードも非常に機能的にできており、一際目を引くアイテム

であった。これが多忙な仕事をまわしていく中で必要不可欠であるということも、私たちにとっては初めて知ることであり興味深かった。

C 班感想

<K 氏インタビュー感想>

今回インタビューをさせていただいてまず感じたことは、病院と在宅の違いを強調していたことだ。やはり K 氏が在宅看護に携わっているので、在宅のほうを推しているという印象を受けた。訪問看護ステーション T は K 氏個人が開いたものなので、ステーションの運営内容を詳しく話してくださった。スタッフのことを考えた運営をするようにしているということが印象的だった。個人運営になるとスタッフとの距離や利用者との距離が近くなる分、スタッフや利用者の要求などをどこまで受け入れるかでスムーズにことが進むかどうかは決まるのかなと感じた。

また、「家で看取る」ということも K 氏は強調していたかと思う。これが K 氏の考える在宅の利点であり在宅看護をやっているときのやりがいなのだと感じた。また K 氏のいままでの経験がこのような考えをもたらしているということが伺える。

<O 氏インタビュー感想>

インタビューをさせていただいて印象に残ったことは、個人運営とは雰囲気が違うなということだった。病院内にあるので、さまざまな症状の利用者を受け持つことができたり、可能なかぎり市内以外の場所でも利用者を取るということから、大きい施設の強みは利用者の範囲が広がるということだと感じた。また、施設内のホワイトボードなどステーション内の工夫もあっておもしろかった。また O 氏が女性であるのもあって利用者のセクハラの問題を強くお話していたのも印象的だった。

大きい施設なのでスタッフの人数は個人運営よりかは格段に多いが、やはり K 氏のインタビューでもあったようにスタッフの数がまだまだ足りないということが感じられた。